

前田「火の山」合戦記(平曲の詞)ならびにその成立(承前)

大 津 不 二 也

(編の本文は、前号掲載)

四の荒筋をたどってみよう。悲しいことに世代は変わっていく。さすがの名城火の山では、光元公もその奥方も去られる。不幸重なる火の山では、孝行な嗣子春元中将を初め臣下一同は、供養をねんごろに営む。

奥方花園の前の父望山(備前・備中を支配する岡山城の太守)は、上洛し肌身離さず持っていた娘花園の姿を写した扇を関白の館に忘れる。関白の臣下が、これを拾う。絵筆で名声の高い望山の絵姿に感嘆しそれを関白に示す。関白は望山を館へ召し、扇の絵姿の主をたずねる。望山は、それが自分の娘であることを答える。関白は、心のよくない人で、すぐに宮中に参り、その扇をお見せすると、帝はこのようなものを妃にしたいと洩らされるのを口実に、娘玉姫の恋の意趣晴らしをしようと思ひ、ざん言をし、ご命令を下されば、火の山城をやっつけて、この花園の前を妃に加え申し上げようと言うので帝は火の山に難題をお命じになる。

関白は、中御門三条前中納言(老体ではあるが、才智にたけている。)を召してその意中を明かす。前中納言は、前田火の山に来て、火の山

前田「火の山」合戦記(平曲の詞)ならびにその成立(承前)

城の形勢は分に過ぎる致し方である、よって芥子種千石・あく縄(灰繩)千把・黒胡麻千石を献上せよ、そうでなければ、奥方花園の前を三十年間宮中の勤めをさせよとの難題を伝える。この思い掛けない難題に老臣たちはいろいろ協議するが、名案が浮かばない。春元公(中将)は、花園の前を宮中に差し出すことができないと心に決する。この難題は、上洛の時に関白の娘玉姫の横恋慕を断わったからであろう、帝の御威光を笠に着ての関白からの難題であるとは思いつながら勅使を追い帰すことはできないと思う。春元公はこれらの品を献上したものは三年無年貢の命令を国内に下す。この命令に、農民たちは勇み立ち、分相当に納め、難題も解決してしまう。臣星野の太郎は、これらの品を揃えて持って行くと、勅使たちは驚くと共に恐れをなし、一度帰国し受取りの用意して下向するまで預かるように言つて、這う這うのていで逃げ帰り、関白に報告する。これを聞いた関白は、火の山城の威勢に驚くと共に、今度「一世に無いもの」を命ずる事になり、第二の勅使加藤の兵部忠澄(悪党一味の首領)を遣わす事になる。

四は、聴取者の喝采を博しようとして、荒唐無稽とも言える内容
が取り上げられている。最初に八写し絵に変わり行く身は悲しけれ
と謡い上げて、残りの内容の大半を予告している。望山は関白邸に
娘を描いた扇を忘れる、関白の臣下がこれを拾って関白に見せる、
関白が望山を呼び出してそれが火の山城に嫁した望山の娘花園であ
る事を知って娘玉姫の恋の意趣晴らしを考える、関白が帝にざん言
をして勅使の下向となる、勅使は尼ヶ崎から舟で出発し前田の浜に
着く、火の山城主以下勅使をうやうやしく迎えてあまりの難題に驚
く、春元公以下一同困却するが春元公が民に下知をする、民たちは
日頃の恩顧に感じて喜び勇んで納めこの難題は解決する、勅使の前
中納言たちはあまりの事に驚いて這う這うのていで都に逃げ帰る、
報告を聞いた関白は今度は「世に無い」難題をもって第二の勅使加
藤の兵部忠澄を差し向ける事になる。これらが、壘みかけるように
謡われて行く。最後の部分にまた筋の次への展開を予告するように
八さあ此れから 如何なる難題がかかるか 火の山城の大忠臣 漸
く当年十七の 信太のふたの次郎の光直が 忠義のために身を捨てて 荒
行致して 神明の利益を蒙り 御勅使の加藤の次郎忠澄と 対決し
た其の未は 首筋擱んで 都へ登り 時の関白広直卿を 向うに立
てて光直が、命にかけて 対決をしようと言ふ あま騒動は 公家
と武家との 意気地立も 矢弾やたまを飛ばし しのを削る 騒動は後
と知られたりVと謡う。

なお、次のような事項が注目される。勅使の下向の道中を謡う
に、八尼ヶ崎より御座船を 早や海上に進め給へば 程もなく
須磨や明石の浦々を 過ぎて矢を射る如く漕ぐ舟は 二十八里の幡

磨灘 見ゆる向ふは四国路や 堅い約束石植や 今ほるぼると殿鳥
安芸の国さへ 程過ぎて 三十六里の周防灘 船中無事に 火の山の
固めと致す 前田浜 勅使の御旗輝かすVのような道行文紛いの美
文調を用いている。また、日頃任迫されているものたちの、せめて
もの鬱憤晴らしが、八：此の度天子様からおしやくしちふものが
立つたげなぢやないか ごつばーもない 事を云ふない 馬鹿言ふ
ない 目の玉と金だまほど違ふ まあそいつが抜かす事にやな 芥
子種とあく縄と黒胡麻納めいとか……V (右肩に傍線を引いたものよう
な方言が用いられている。) 八虎の威を借る狐武士 おかしき事と……V
などの中に潜んでいるようである。また、八：星野の太郎盛平は
正三位の御装束 中納言に一札なし 身は從三位中将春元が臣 星
野の太郎盛平なり……Vとあるが、(二)では、春元は從二位、星野の
太郎は從三位である。そのほか、文を終止するのは已然形や連体
形を用いている。文の終りを連体形にするのは謡い物として許さ
れるとして、音調を調えるためとは言え、文を已然形で終止するの
は破格と言わざるを得ない。(「変り行く身は悲しけれ」、「……あざけり笑
ふも道理なれ」の如き)。また、文を連用形で終止して、後を省略する表
現が見られる。また、方言らしい語もある。また、「あま騒動」
「矢弾」、「花園殿」、「関白殿」、「広直卿」など、前の(一)・(二)
・(三)では見かけない用語がある。(一)・(二)・(三)に見える、「……た
事なれば、……。」の既定条件を表わす表現は、見当たらない。
以上のような事などから考えると、四は、(一)・(二)・(三)とは作者が
違うではあるまいか。

(五)

八松千代に 栄ゆる緑も いつか枯れ 堅き金城鉄壁も 時
 至らば その用を失ひ ここに名城 火の山も 滅亡の時
 至りける 〱 ここに中将 春元公 臣等一統 御前に集め
 両眼を うるませ給ひ 春「やよ臣等の者 承れ 林の中の
 高い木は 風に枝をば 折らるる習ひ 我れ火の山を 領
 してより 時の関白広直が 仕業にて 朝廷のねたみを
 蒙り かく難題を 受けるとは 如何なる過去の 報ひぞ
 や 察してくれよと ばかりにて 天魔鬼神も 恐れざる
 古今無類の 名将も 暫し落涙 遊ばせば 臣等一統
 ご道理と 貫らひ涙に 暮れにける 折から次の ひと間
 より 星野の太郎 盛平は 屈托顔に 出で来り 席に
 着して 臣等を見やり 星「如何に方々 大和より 此の度
 第二の 使者として 加藤の兵部 忠澄殿 勅使の次第を
 承れば 以つての外 御難題 金の扇に 鶯の 雛を
 十二羽 とまらせて 立たう立つまいの 所 翼を拡げ
 法華経を 高音の声を 帝が御所望 若し叶はずは御台をば
 御所の勤めに 望まると 世にあるものなら ともかくも
 口づさみにも なきその扇 如何に方々 御協議」と 忠
 義にこりたる 盛平が 声震はして 一同を見渡す事なら
 数多の武士も 無念の拳^{こぶし} 握りつつ 髪逆立てて 怒れる
 眼 なんと答へん 人もなし 春元公は 目をしばたき
 春「かくなる上は 是非もなし 我も此の場にて 切腹致さ

前田「火の山」合戦記(平曲の詞)ならびにその成立(承前)

ん 花園も共に自害させ しるしを持って 大和へ登り
 弔ひ合戦 致すべし」と 云ひつつ座をば 立ち給ふ か
 かる所へ 声ありて 信「君には御短慮 先づ暫く 御生害
 とは 何事」と にじり出でたる一人は 十二勇士の 所
 の中で 若年なれども 信太の次郎 君には御覧 遊ばし
 て 春「予が生害の 妨げ致すは 不忠者 控えて居らうぞ」
 信「御意に候 某が 若年者の 身を以て 老臣を 差
 し置き をこがましくは 候へど 此の度の 帝よりの
 御難題 金の扇に 雛鶯 翼を揃へて 高音をば 上げ
 る姿を 光直が 命に代へて 差出さん 三七日の 御
 猶予を 給はれかし」と 涙をのんで 言ひ放ちたる 事
 なれば 中将公を 始めとし 諸士一統は 胸撫でおろす
 星野の太郎 盛平は 星「出かされた 光直殿 家中も多き
 その中に 人にぬき出でたる そのお言葉 世になきものを
 差出すとは その場のがれの 一言ならめや それとも此か
 ら お見込みか」と 皆まで云ひはず 信太の次郎
 信「執権様には 今の一言 狂気ばし 召されしか 若年
 者と 侮つて あざけり給ふか 知らねども 無益の問答
 致さんとより 三七日の 善悪は 某きつと」 星「光直殿
 それにて 盛平 安堵でござる 御勅使様へ 此の事を
 申し伝へん 方々さらば」と 盛平が 二の丸さしてぞ
 急ぎ行く ここに勅使の 兵部忠澄 お供の者に うち向
 ひ 兵「如何に名家の 火の山も 世になきものを 出す事
 は 叶ふまじ 花園前を 出だすであらう されば都へ

連れ帰り 帝へ捧げ 奉りなば 広直卿にも 御満足

兵部でかした 天晴れと 重くその身は 用ひられ 出世

致した 暁は その方共にも 格別の 恩賞とらす」と

ありければ 臣のめいめい 口口に 臣「忝かたじけなふは 候へど

とかく浮世は ままならぬ 葉露の 枝につく心 危いも

のぢや」と 話の内に 星野太郎 盛平は 星「三七日の

御猶予を 給はれかし」と 願ひ出す 事荒ら立てては

火の山の 古今の勇士 盛平が 万一怒つた事なれば 我

我一同 皆殺し 兵「猶予致す」と 忠澄が 三七日の

御滞在 ここに變りて 信太の次郎 御前をさがり 只独

り 君の為には 何のその いとほぬ身命 投げうつて

兼ねて信ずる 四王司山 毘沙門天に 祈願して 命をか

けて 利益を受けん その日は屋敷へ 立帰り 信太の次

郎 光直は 過ぎつる頃に 父に離れ 母に我が妻 あ

るばかり 御殿の首尾を 母親に 語り聞かして 光直が

信「我は此れより 四王司山へ 社参の覚悟 三七日が

その間 祈願をこめて 叶はずば 我はその場で 一命果

す 所存故 その日を待ちて 帰らずば 信太の家も

滅亡」と 聞くに 母親 勇み立ち 母「でかしたせがれ

それでこそ 信太の家の 誉れぞや 草葉の蔭で 我が夫

が 喜び給ふ 御顔を 今見るような 心地ぞよ でか

したものでや」と 母親が 口には云へど 心には 如何に

神とて 仏とて 無理な願ひが 叶ふべき 死ぬる覚悟か

悲しやと せきくる涙 のみ込んで 母「婦姫せがれの 用

意を」と 心も清き 白装束 死出の晴着と 婦姫かか着せる

人より 着る人の 心は千万無量なり 哀れと云ふも 愚

かなり 母は手づから 取り出す 神酒・鈴・かわらけ

三宝に 載せてしづしづ せがれの前 母「心ばかりの 祝

ひ出は 願の叶ふ するしぞ」と 差し出す母の 心をば

いぶかる次郎 光直が かわらけ取りて なみなみと 受

けてひと息 呑み乾すは 母「母上様」と かはらけを 渡

すも 別れの 盃と 三たび交して 威勢よく 此の度願ひ

叶はずば 再び屋敷へ 帰らじと 実にますらをの 一筋

は 御山へこそは 分け登る 彼を見送る 母親は こ

らへこらへし 潜め涙 一度にわつと 泣きくづし 暫し

正体 なかりける 君のおん為 予てより 覚悟の事とは

云ひ乍ら 立ち場の酒を 母の手で 飲みますと云ふは

何事ぞ 武士の習ひか 知らねども 無念な事ぢやと 泣

き沈む お道理様と 恩愛の 涙に咽ぶ 奥方の 心の

内ぞ いぶかしき ここに互の 覚悟して 涙に残す書置

を せめて家中 の方方に 武士の誉れに 残さんと

自害致して 果て給ふ 變る話は 光直が 四王司山

毘沙門天の 社殿の方に 畏みつ 願ひ奉る 当山鎮座

の 毘沙門天 光直不憊と 思召し 忠義の功を 立て

させ給へ 三七日が その間から 断食に 一心不乱

身は逆立ちの 荒行に 神も納受ましますか 三七日の

夜明け方 今日満願の 当日と 心もゆるみ 光直が

そぞろ眼を 閉ぢたる所 あら不思議や こは如何に

現はれ給ふ。 毘沙門天 声朗らかに 告げあり 毘「善哉 承れ 汝荒行の功により 此れなる扇 与ふべし 我は当山の 毘沙門天也 夢夢疑ふ 事勿れ」 御告げの声と 諸共にかき消す如く 忝し 光直如きの願ひをば 神には 納受ましますか 御告げに 賜はる扇をば 推し戴き 三拜九拜 聞けば不思議や 輝き渡りまばゆきばかりの 扇には 並ぶ鶯 十二羽は 翼を拵げ法華経と 高声もひと声 光直も 信「あ一世の中は 不思議也 争はれぬは 神力の加護 此れさへ手に 入る事なれば 拙者の忠義も 立つ道理」 上使に伴して 都へ登り 時の関白 広直を 取つて押へる 時節到来 三千年に 一度咲く 八千代の椿 憂曇華の花を咲かして見る心地 毘沙門天に 三礼終り 宙飛ぶ如く 火の山城へ 馳せ帰らる 光直は 容貌天魔の 如くにて 御前へ進んだ 事なれば 星野の太郎を 始めとし 並みある諸家中 一同は 今日一日を 千秋の思ひ 火の山城の幸運不運 天地の分け目と 待つ所 息も絶え絶え 信太の次郎 ありし次第も 落ちもなく 言上致して 神力の加護給はりし 扇をば 差し出だしたる 事なれば 春元始め 一同が 夢に夢見し 心地にて 信「ああ恐るべき 神の加護 此の扇さへ 手に入らば 勅使兵部の荒肝ひしぎ 世になきものを 出す上は 大和の皇居へ馳せ登り 悪逆非道の 広直を 取つて押へて ひと合

前田「火の山」合戦記(平曲の詞)ならびにその成立(承前)

戦」と 血気にはやる 勇士一同 星「まづ暫く」と 制し置き 太郎盛平光直と 共に出丸へ 出で来たり 出丸の方には 勅使の役 加藤兵部 忠澄が 今日絶体絶命だ どうなる事かと 待つ所 星野の太郎は 勅使に向ひ 星「これは勅使 兵部殿 帝よりの 御難題 今日整ひ 候故 慎んで帝へ 納め奉る」 聞くに勅使は余りの事に あきれ果てたる ばかりなり ややありて 勅使の役 兵「やなに神祕には 似たれども 左様なものがあるべきぞ 虚言を作り 此の方を 欺かんとは 言語道断 某実見致すべし」 その疑ひの一言に 短慮極はまる 光直が 信「だまり居らうぞ 火の山に 偽りのものあるべきぞ 拙者身命を なげうつて 君のため 差し出す扇 実見なぞとは 片腹痛し 今一言 申して見よ 此の信太の次郎が 許さん」と 突つ立ち上がつて ねめつける 両眼人を 射るばかり その権幕に 兵部を始め 御供の人数 色青ざめ わなわな震へて るたりける 兵部は弱味を 見せまいと 兵「こぞかしや 火の山の小冠者 陪身者の 身を以て 勅使の拙者へ 礼過言 上を恐れぬたわけ者 その分には 差し置かぬぞ 三つ指ついて あやまれ」と 勅威を笠に 忠澄が 叱り散らせば 光直は 信「えー虎の威を借る 狐武士 汝関白広直と 心を合はす大悪人 許す奴では なければども 勅威に對して のがしとらす」 兵「何を小頼な 小冠者奴 都の勇士 加藤の兵部 忠澄が、一刀受けて見よ 観念せよ」と 云うよ

り早く 臣に持たせた 一刀を 抜く手も見せず 鋭き切
つ尖 微塵になれと 斬りかかる 早や此れまでと 盛平
が 目くばせ致した 事なれば 光直はつと 身をかはし
信「小頼な腕立て 致しなば こうしてくれん」と 飛鳥の
如く 手許へ飛び込み 拳を固め 眼くらんで 倒るる所
首筋つかんで 光直が 信「やーやー光直が 家来の者共
きやつ等を 一「からめとれ」 はつと数多の 家来共
ばらばらと 入り来たり 家「やーやーそなる 腰抜け共
火の山武士の 腕前見よ」と お供残らず からめ取り
八信太の次郎 光直が 使となつて 大和へ登り 時の関
白 広直と 命を的の 対決が そも合戦の 本となり
小丹の中將 春元が 官軍相手に 大合戦 聞くと云ふよ
な 騒動は 後の愉快と 知られたり▽

田の荒筋をたどつてみよう。千代に栄える松の緑もいつか枯れる
ように、堅い守りの火の山城も滅ぶ時が来る。城主春元は、時の関
白から妬まれ、難題を言い付けられることを嘆いて落涙し、臣下た
ちも貰い泣きをする。そこに、星野の太郎が現れ、金の扇に驚の難
十二羽をとまらせ飛び立とうと翼を広げてほうほけきよと高音の声
で鳴く姿を所望しそれができなければ奥方を宮中に勤めさせよとの
第二の勅使の言を伝える。臣下たちがいろいろ協議するが、どうに
もならず、無念がる。城主春元は、花園と共に自害してそのみしる
しを持って大和へ上り、弔い合戦をせよと言つて、席を立とうとす
る。そこに、若年の信太の次郎（十二勇士の一人）が名のり出て、三七

日の猶予を願う。

星野の太郎は、勅使に三七日の猶予を願ひ出る。信太の次郎は、
かねて信ずる四王司山の毘沙門天に祈願して生命をかけてご利益を
受けようとして屋敷に帰り、これを母と妻に告げる。母は、わが家の誉
れとし、水盃を交わし、母と妻とは後顧の憂いを断たせるために書
き置きを残して自害する。信太の次郎は、毘沙門天に詣で、三七日
の間一心に断食と苦しい荒行をなす。その心が通じたのか、毘沙門
天が現れて、輝き渡りまばゆいばかりの扇の上で十二羽の鶯が翼を
広げてほおほけきよの高音をあげるものを授ける。信太の次郎は三
拜九拜して、火の山に立ち帰り、事の次第を申し上げる。血気には
やる勇士たちは、この扇を得た以上、勅使加藤の兵部たちを脅かし
大和の皇居へ馳せ上り、悪逆非道の関白を取り押えてひと合戦しよ
うといきり立つ。星野の太郎は、これを制し、信太の次郎と共に出
丸へ行く。勅使たちは、この難題のものが整ったとのことばにあき
れ果てて、このような神祕に似たものができる筈は無く、虚言を吐
くとはけしからん、実見しようと言う。信太の次郎は、勅威を笠に
着ての勅使たちの非をなじり、にらみつける。怒つた勅使の兵たち
が斬りかかるが、かえつてかれらをやつつけ、残らずからめ取る。

この内容は、四よりさらに荒唐無稽なものと言えよう。

(三)の最初の部分（八写し絵に変わり行く身は悲しけれ）が(三)の内容の展
開を予測せしめるものであったのに対して、この田の最初の部分
（八松千代に栄ゆる緑もいつか枯れ堅き金城鉄壁も時至らばその用を失ふここに名城火
の山も滅亡の時至りける）は、(六)・(七)の展開をも予告したものとなつて

いる。 (田)の最後の部分は、(一)・(二)・(三)・(四)の場合と同じ形式を取り、八信太の次郎光直が 使となつて 大和へ登り 時の関白広直と 命を的の対決が そも合戦の本となる 小丹の中将春元が 官軍相手に大合戦 開くと言ふよな騒動は 後の愉快と知られたりゝとなつて、(六)の筋の展開を予測せしめるものとなつてゐる。また、筋の展開に當つても、その内容との関係もあるうが、事件を次から次へと畳みかけるように謡い上げて、(四)よりもさらに虚構性が高い。これは、多くの劇的要素を巧みに組み合わせてひとつの物語にまとめあげて、聴取者の喝采をねらつたものであらう。

毘沙門天は、四天王のひとつで、像は忿怒相の武神形であると言われ、武士の信仰が篤かつたようである。この毘沙門天に祈願して神祕が現れるあたり、信仰を説く説教節か、江戸時代初期に流行した人形芝居の謡い物かの感じがする。(四)と違つて、「……た事なれば……」の既定条件の表現が見えるところから、(四)の作者とは違ふのではなからうか。

(六)

八登り行く山も 下りがあるとかや 流石盛りの 火の山も
早や合戦の 時機となる▽ 信太の次郎 光直は 勅使を
始め 供人を 一人残らず からめ取り 中将公の 目
通りへ 引き出だし 信「諸士の方方 合戦の 御用意あつ
て 然るべし 拙者は此れより 大和路へ 登城致して
広直と 対決致し 事穩便に 計らはんとは 思へども
万一思ひ 叶はずば 大和に於て 花花しく 一戦に及ぶ

前田「火の山」合戦記(平曲の詞)ならびにその成立(承前)

覚悟 此れが此の世の お別れに ならふも知れず」と
光直が 真心こめし 一言に 中将公も 諸士方も 諸
の花を 大和路の 嵐に散らす いたはしき 別離の宴を
開かん」と 早速用意 致されて 御台も共に 立ち給ひ
御言「わらはがかしづき 申してより 火の山城の 御不運
臣等の考へも 様様と 掛ける苦勞の いたはしや 自害
せんとは 思へども 君の安否も 氣遣ひて おめおめ浮
世に 永らへる わらはの胸の 苦しさを 推ししや」
と ばかりにて なげき給ふぞ いたはしや 中将始め
御台様 名残の御流れ 下げ給ふ 次郎は万感 胸に迫り
落つる涙も 止めかね 信「かかる不幸も 関白が なし
たる業か」と 無念の齒がみ 怨みをのんで 一同に 別
れて次郎 光直は うはべは使 内意は いくさの準備
充分に 貝鐘 太鼓の 用意さへ 火の山城の 威勢を
ば 振はんものと 諸士を励まし 大和路指して 押し登
る 変る話は 広直卿 臣等を集め 御評定 四「如何
に者共 火の山に 勅使に向けた 加藤の兵部 未だに帰
り 来らぬは 唯事ならずと 覚えたる 諸国へ 沙汰
を致すべし 如何に堅固の 火の山も 寡は衆に敵し 難
しのたとへ 早く用意 一同に」 御意を下した 事なれ
ば 畿内五ヶ国 残りなく 山陰東海各国の 諸侯にそれ
ぞれ 使者が立つ 使「今回火の山 城の主 小丹の中将
春元儀 帝に弓を 引き奉る 諸侯の忠臣 帝のために
尽すべし 帝を救ひ 参らせば 火の山の領地 分け与ふ

べし」と 関白殿の 上意のもとに 諸候方 戦場の用意
 に 取掛る かくとは知らぬ 僅か小勢を 従へて 上
 洛致し 関白殿の 御館へ 火の山の使ひと ふれ込めば
 すは椿事出来と 騒ぐ臣等を 制止止め 奸智にたけし
 広直卿 静かに目通り 許される 臆する色なく 光直は
 広直卿の お目通り 頭を下げて 控へける 広直卿は
 目下に見下し 関「火の山城使 御苦勞千万 花園殿を
 召し連れ参りしか 過分過分」と 横柄に あざける如き
 有様を はつと怒つて 光直が おのれと心は はやれど
 も ぐつと静めて 笑みをば含み 信「恐れ乍ら 火の山
 の城使を 致して 信太の次郎 罷り越したは 余の儀に
 あらず 如何なる罪か 知らねども 火の山の 難題
 芥子種アク縄黒胡麻は 世にあるものとも 臣等一統 苦心
 の連ね ようよう調達 致せし所 第二の御使者 加藤の
 兵部 世になき難題 臣等の一統 とやせんかやくと 御
 評定 ためらふべきに あらざれば 命を的に 某が
 神力の加護を蒙り 不思議に得たる 此の扇 帝に捧げ給へ
 かし」と 恭しくも 取り出だす 扇を広直 引つ掴み
 開けば以前の 如くにし 流石の広直 身を震はせ 暫し
 言葉も なかりける 関「して又勅使は 如何が致した」
 信「我等が陣所に 待たせ置き 候 扇御受納 致さる
 や」 関「如何にも受納 致すべし 今日此れにて 下が
 れよ」と 横柄極はまる 一言に 怒りの声を はりあげ
 て 信「いやや関白 広直卿 拙者が苦心の その扇

帝へさへも 納めずに 下がれとは その意を得ず 帝へ
 かこつけ 関白が 私事の 計らひか えーいそれとは
 知らず 今日まで苦心 致すとは 残念無念」と 思はず
 ざつと 座を進め 信「さあさあ関白 広直卿 御勅命と
 偽りて 私事の 計らひに かくまで我等を 苦しめたか
 あーら無念 口惜しや」と きつとにらんだ 両眼は 天
 晴れ勇士 ますらをが 真心こめし 事なれば 広直立っ
 て 居合腰 関「無礼であらうぞ 尊くも 関白を預る
 広直に さまざまの 理屈だて 今一度 申して見よ
 助けは置かぬ 狼籍者」 信「いや小賢しや 狼籍呼ばはり
 狼籍致した 覚えはござらぬ」 関「や一言葉を返す 狼籍
 者 そーれ見て取れ」と 下知のした 予て用意の 者ど
 もは 御用上意と 光直を 追つとり囲み 打つてかかる
 はや此れまでと 光直が 群がり立つて 来る奴を 取つ
 ては投げつけ はね飛ばし 或は蹴返し 打ち倒す 千変
 万化の 働きは 凡人業とも 思はれず 恰も夜叉の
 荒れたる如く 四角八面 縦横無尽 またたく間に 七八
 十 討つて倒した 事なれば 猛勇不敵の 働きに こ
 は叶はじと 広直始め 一同屋敷を 逃れ出で 清涼殿へ
 身を忍ぶ 洛中一般に 此の事が 知れ渡つた 事なれば
 予て用意を 致したる 近郷近在の 大小名 各軍勢を
 従へて 火の山勢を 従へて 火の山勢を 一戦に 揉
 み潰さんと 関の声 旗馬印を 押し立て押し立て 我れ
 一騎勝の 功名を 人馬を連らね 潮の如く 貝鐘太鼓

勇ましく えんえん堂堂 押し寄せ来る 此処を千途と
 水直が 火の山城に 使者を立て 一族郎党 四百余騎
 どつとばかりに 立ち向ふ御本陣には 関白広直 馬上ゆた
 かに 大音声 関「やーやー火の山の 小冠者 朝廷より
 の 綸旨を以て 向ふたり それ朝敵を 征伐」と 云
 ふ問あらず 水直が 馬上に突つ立ち 信「云ふな関白
 汝が娘 事の起こりは 玉姫が 我が君様へ 恋慕の結果
 かような事に 相成つた」と 聞く関白 広直卿 関「や
 ーや者共 進めよかし 問答無益 押し潰せ」 それと
 云ふより ひしめき渡り 群がり競ふ 数万の 大軍の中
 事ともせず 信太の次郎 水直が 五枚しころの かぶと
 を戴き 黒糸緘くろいとぢの大鎧たい 南部粟毛むつとの 名馬には 金覆
 輪かぶとの 鞍を置き 四尺に余る 大刀を 真甲まがらに振り か
 ざし 群がり立つた 敵勢の 真只中へ 容赦なく 馬
 をおどらせ 飛び込む武者振り 敵も味方も それと見て
 あれよあれよと 云ふばかり 此れに続いて 味方の者
 我劣らじと 斬つて入る 忠義にこつたる 大刀風に 当
 るを幸ひ 斬り立てる なれど味方は 小勢にて 敵の遠
 矢に 射立てられ 残り少なく 倒れたり 中にも次郎
 光直は 人なき原を 行く如く 唯此の上は 広直に
 恨みの一刀 報ひんと 先陣二陣と 突き崩す 山なす屍しかばね
 に 瀧なす血潮 草木を染めて 物凄く 折から聞ゆる
 貝鐘太鼓 総大将は 小舟の中將 梨地に竜の旗印 星野
 の太郎 盛平は 九曜の星の 旗印 勝山彈正 倉之助
 前田「火の山」合戦記(平曲の詞)ならびにその成立(承前)

三羽鳥の旗印 内藤左内 土佐の守 浪に千鳥の旗印 青
 山太郎 義重は 水色 葵あおいの旗印 旗差し物を 押し連ら
 ね 短兵急に 攻め登り 中にも中將 春元は 金切り
 割りの 采配を 打ち振り打ち振り 威勢よく 都の軍勢
 一戦に 蹴散らしくれんと 勢凄く 攻め登るので 八さ
 あ此れから 大和の国が 一同に 煮えかやるか 砕けて
 飛ぶか 続いて火の山 落城は 追追後と 知られたり√
 (内の荒筋をたどってみよう。山に上り・下りがあるように、火の
 山にも盛衰がある。信太の次郎は、勅使たちをからめ捕えさせ、春
 元公の前に引き出し、皆に合戦の準備を勧め、自らは大和へ登り、
 関白と対決し、事を穏やかに解決しようと思うが、思いが叶わない
 時は、大和ではなばなく一戦に及ぼうとの決意を述べる。春元公
 ・奥方は、信太の次郎のために別れの宴を開かれる。信太の次郎は
 表面は使者とし、内意は合戦の準備をして、一族郎党を引き連れて
 上洛する。一方、関白方では、第二の勅使が帰らないのでただ事では
 はないと思い、畿内・山陰・東海の諸侯に使者が立つ。こんな事と
 は知らない信太の次郎は、僅かな小勢を従え関白の館へ火の山の使
 者として参上し、世にない難題の扇を、神力の加護によってようや
 く得た事を述べて、関白へ差し出す。関白は身を震わせるほどに驚
 き、いやいやながらそれを受取る。その横柄な態度に、信太の次郎
 は怒って、関白の帝の威を借つての行為をなじる。関白が待ち構え
 ていた者どもに命令を下して戦いとなる。信太の次郎は、またたく
 間に七・八十人を討ち倒す。関白はかなわないと知って清涼殿に逃

げ込む。この事が洛中に聞え、かねて用意をしていた近郷・近在の大名の軍が潮のように押し寄せ、信太の次郎は、火の山城に使者を送る。信太の次郎の一族郎党四百余騎が、関白の数万の大軍と立ち向い、信太の次郎は敵の中で奮戦するが、味方は残り少なくなる。そこに、春元が総大将となり、星野の太郎盛平、勝山弾正倉之助・内藤左内土佐の守、青山の太郎義重などを引き連れて上落する。

なからうか。

内容は、春元公・奥方・臣下たちから別れの盃を頂き上落した信太の次郎と、関白との問責の問答、信太の次郎その一族郎党と関白の軍勢との合戦である。この合戦の描写は、戦記物語における武將のいでたち、戦闘の場面の描写の模倣である。最初の部分（△登り行く山も上り下りがあるとかや 流石盛りの火の山も早や合戦の時期となる▽）は、（内）の内容への展開を予告している。最後の部分（△さあ此れから 大和が一同に煮えてかやるか酔けて飛ぶか続いて火の山落城は 追追後と知られたり▽）は、次の（外）の結末を予測せしめる。これは、（一）・（二）・（三）の構成と同じように思われる。

なお、文を終止するのに連体形を用いるとか、文を連用形で終止するとかは、前の各章と同じである。そのほか、「……た事なれば、……。」のような既定条件の表現や、「嵐と散らすいたはしき」のような体言止めの感嘆文が目立つ。「煮えてかやる」の「かやる」は、方言的なものではなからうか。「かやる」は、（一）に「上下かやる」の「かやる」と同じ用語である。

以上の事から考えると、（一）・（三）・（四）・（五）とは、作者が違うのでは